

ほっとインタビュー

引きこもり時に多数の哲学書と出会い、執筆を続ける

しんめいPさん(36)

虚無感を埋めた東洋哲学



留学機に宗教見つめ

人生のピークは東京大に合格した18歳の時だったと著書の中で振り返る、しんめいPさん。卒業後の14年間で職と家と妻を失い、あり余る時間と虚無感を埋めるように読んだ多くの書籍の中で東洋哲学と出会い、自分探しのまさかの答えが「本当の自分とか、どうでもよくなった」だったという。

(伊賀明)

——著作『自分とか、ないから。教養としての東洋哲学』の中で釈迦、龍樹、老荘(老子・莊子)、達磨、親鸞、空海の思想を取り上げました。登場する大半が宗教者ですが、自身の信仰は。

しんめいP 特にこれといった信仰はありません。実家の宗旨は浄土真宗でしたが、実家のある大阪府岬町は和歌山県に近いこともあるからか、地域としては弘法大師を身近に感じていました。著書の中でも親鸞聖人と弘法大師空海の思想を取り上げましたが、自分と縁があったのかなと思います。

——執筆前の宗教へのイメージは。

しんめいP 執筆前でも段階があって、高校生の頃までは宗教といえばカルト的なものを連想して、良くないというイメージでした。特に、1995年に地下鉄サリン事件を起こしたオウム真理教関連の事件や、2001年にイスラム過激派テロ組織のアルカイダが起きた米国同時テロ事件などのニュースを子どもながらに見聞きするうちに、社会的トラウマとなって宗教とは怖いもの、危険なものだと思うようになっていました。

学生時代の09年に米国へ約1年間留学する機会がありました。そこでは瞑想やヨガが当たり前のように盛んで、ある種のカルチャーショックを受けました。マインドフルネスが世に出始めたのもこの頃だと思えます。当時の日本で瞑想なんてしていたら、めっちゃめちゃ危ない人という印象を持ってしまいう時代でしたが、米国での現状を肌で感じる事ができて、社会が宗教を拒絶する必要はなく、受け入れてもいいのかなと、宗教そのものを見直すきっかけになりました。

離職や離婚経て

——もし留学での経験がなければ東洋哲学との出会いもなく、著作も生まれなかったかも。

しんめいP そうかもしれないですね。ニートになって実家



しんめいぴーさん=1988年、大阪府岬町生まれ。東京大法学部を卒業後、様々な職業を志すも失敗。実家に引きこもっていた時に東洋哲学と出会い、2024年に『自分とか、ないから。教養としての東洋哲学』を出版した。



次回作に向けて『声字実相義』を読むしんめいPさん

つめ直す

字との経験がない
字との出会いも
生まれなかった
そっかもしれ
トになって実家

その後、大学生になって教養の一つとして初めて買った哲学書が中村元氏の『龍樹』でした。当時、近代を批判する

しんめいP 家にあった鈴木大拙氏の『仏教の大意』でした。この本が東洋哲学を知るきっかけになったと思います。

——初めて手にした東洋哲学書は。

しんめいP 家にあつた鈴木大拙氏の『仏教の大意』でした。この本が東洋哲学を知るきっかけになったと思います。

50冊の東洋哲学書を読んでいた時には、14年間の社会人生活で立て続けに離職や離婚を経験し、実家に引きこもる息子の書棚に怪しげな本が並んでいることから「相当思い詰めているのでは」とかなり心配していたと、後から親に聞きました。私自身も思い詰めていたところは少なからずあつたと思いますが、子どもの頃の宗教へのイメージが、いい意味に働いて読む本の選び方に抑制が利いていたのだと思います。

ポストモダンとしてフランスの現代思想家が挙げられることが多い、入試問題に取り上げられることもあつたことから知っておくとかっこいい、くらいに思っていたところ、実は東洋の龍樹の思想が西洋のポストモダンより問題を先取りしていると聞いたので読んでみました。でも内容は難しくよく分からず、それきりでした。

——今後、第2弾、第3弾の著作で、ほかの哲学者や宗教者を取り上げる予定はありますか。

しんめいP 出版してから比較的良好に言われたのは「日蓮聖人が出てこない」と。次回作の準備は進めています。哲学者や宗教者の思想に触れる統編ではありません。次は今回の著作で扱った釈迦

と空海 of 思想の中から「中道」と「声字実相義」の考え方を深めて、現在世界中で問題となっている戦争や経済格差、移民問題などの社会的分断について西洋的な二元論での分析方法を超えた「中道」の再評価を試みたいのです。

——現代の宗教者に望むことは。

しんめいP 例えば家族と自分にとって大切な存在の安否を心配しているときは、心の負担が大きいものですが、そんなときに代わりに祈ってくれる宗教者の存在はとても頼もしく感じます。自分ではどうにもならないことに對して祈ってくれることで心が楽になり前向きになれると

読者から「般若心経の本を読み始めました」というコメントをもらったりするなど、特に若い人から関心を持ってもらえているという実感を得ました。カジュアルな法話など若者向けのコンテンツを増やして、寺院や宗教者が心の拠り所として心に負担を抱える人々の受け皿になることを願っています。

今回の出版を通じて、読者の方々が東洋哲学に親しみを感ずることで、伝統宗教との橋渡しになってくれればと思います。

心の救済を期待